

---

初期中世の黙示録写本挿絵サイクルにおける挿絵とテキストの配列関係

- ヴァランシエンヌ本とパリ本を巡って -

法政大学 濱西 雅子

---

初期中世の黙示録写本挿絵サイクルは、その多くがP. K. クライン(1975年)等により古代末期の失われた原本(500年頃ローマで制作されたと推定)に遡ると推定されている。本発表は現存する最初期の作例のうちカロリング朝の姉妹写本、ヴァランシエンヌ本(Bibl. Mun., Ms. 99, 9世紀第一四半世紀)とパリ本(Bibl. Nat., Ms. nouv. acq. lat. 1132, 10世紀初頭)を巡って、従来論じられることが少なかった挿絵とテキストの配列関係について考察し、両写本の母写本(7世紀ノーサンブリアで制作と推定されている)、ひいては古代末期の原本の姿を解明することを目指すものである。

この姉妹写本のテキスト及び挿絵の内容は大方一致するものの、両者の形式上の関係は相違している。ヴァランシエンヌ本ではわずかな例外を除き、テキスト頁と全頁大挿絵の頁が見開きで一対として配されている。一方パリ本では全頁大の挿絵はまれであり、ほぼコラムピクチャーの形式をとっている。両写本に関して、H. オモン(1922年)による先行研究があるが、発表者が両写本の実見調査並びに写本全体の写真資料を基に綿密な比較検討を行ったところ、テキストの配列に関する彼の記載に誤りが少なくないことが判明した。すなわちヴァランシエンヌ本では、テキスト頁と挿絵頁の内容が見開きでほぼ対応しているのである。この原則をはずれる例外的な箇所も見出されるが、それこそ問題を解く重要な鍵となる。まずヴァランシエンヌ本で唯一テキスト頁が見開きで続く箇所(fol. 31v- 32r)については、「バビロンの倒壊」場面(パリ本 fol. 25v)に相当する挿絵が省略されたためと判断される。それゆえ次に位置する挿絵では、パリ本の挿絵二図の銘文が合成されている。さらにパリ本の多くの挿絵で、銘文が不自然に配されている点(例えば fol. 7r では銘文がモチーフの左右の狭い空間に短く何行にも亘って配される)や、本文テキストの最終行と同じ高さまで挿絵領域が広がっている点等を考慮すると、ヴァランシエンヌ本と比較してパリ本は、母写本からかなり逸脱・変化したヴァージョンとして位置付けられる。

以上のような考察から、両写本の母写本においては、基本的に全頁大挿絵の頁が対応するテキスト頁の直後に見開きで一対に配されていた可能性が高い。パリ本は母写本に比してかなり小規模に制作されたため、画面の高さが低く抑えられ、見開きの対応関係も崩されたと考えられる。従ってパリ本に基づいて、両写本の母写本がいわゆるコラムピクチャーであったと想定する従来の考え方には修正が必要である。この結果は現存最古の黙示録挿絵サイクルであるトリーア本(Stadtbibl. Cod. 31, 800年頃)の挿絵とテキストの配列とも合致し、古代末期の黙示録原本の挿絵とテキストの関係を再構築する上でも貴重な手掛かりとなるものである。